E 16

高齢者の住まいに関する研究（第一報）

福岡教育大学 ○高崎良子　秋山晴子

目的；人口1億2千万人のうち1377万人、9人に1人が一般に高齢者と呼ばれる65歳以上の老人である。更に今後この数値は確実に増加すると言われている。このような状況の中で、高齢者にとって本当に住みよい住まいとはどのようなものかを知ることを目的とする。そのため実際に高齢者がどのような日常生活を送り、どのような住まいの状況か、住まうことへ何を希望しているのか、住宅のどこを改善して欲しいか、今後の暮らし方などを調査し、知見を得たので今回はこれらの点を報告する。

方法；北九州市市内3区において民間賃貸住宅及び持家に居住する60歳以上の高齢者（任意抽出による）を対象として、アンケート調査を行った（1988年10月）。アンケートの内容は次のとうりである。1)現在の状況について　2)現在の住宅について　3)現在の生活について　4)今後の住まい方について

結果；高齢者が生活していくうえで必要になる住宅設備（特に水まわり）、設備（主に廊下）に、まだまだ改善、改良がなされていない世帯が多かった。設備には今後課題になるものの一つとして電話が挙げられている。また同居についての意識や住み方、その条件などを見ると、そこに影響を及ぼす要因に「健康状態」が大きくかかわっていることがわかった。健康な人ほど同居をせず、自由な暮らしをしたいと望み、体が弱くなってくるにしたがって子供世帯と同居という数値が増加している。また同居に際しても「居間」に関する意識に、子供世帯と高齢者世帯との間に大きく差が認められ、今後高齢者の住まいを研究して行くうえで有意義なものであり、第二報でこれを報告することとする。